三川内焼の源流を訪ねて

本会幹事　　草場　里見

１．熊川窯の復活

文禄慶長の役（１５９２～９８）において、平戸の領主松浦鎮信は朝鮮の熊川（こもがい）に住む陶工ら百数十人を平戸に連れ帰った。安政４年（１８５７）金森得水が著述、刊行した『本朝陶器攷證巻一』に、「平戸領早岐郷、三河内山陶器ノ草創ハ、慶長三年朝鮮ヨリ御帰陣ノ節、松浦式部卿法印鎮信、熊川ノ陶器師巨関ト云者ヲ連レ帰リテ、平戸島中野村ニテ始テ陶器ヲ製セシム、是ヲ中野焼ト云、其風ハ高麗ノ風ナリ」と記載されている。

熊川は、朝鮮半島南部の慶尚南道昌原市鎮海区にあり、釜山から西方約２５㎞に位置する海岸沿いの町である。人口は現在１万３千人ほどである。海に面した南山という山には、小西行長軍が陣を置いた熊川城跡がある。

熊川焼は、１５００年代初めに生活に使う低品質の茶碗を焼いたのが始まりで、高麗青磁、朝鮮時代の白磁、粉青沙器（ふんせいさき）などが作られた。１５９８年に松浦鎮信が熊川の陶工たちをが平戸に連れ帰ったため、熊川窯は１００年足らずで途絶えてしまった。

崔熊鐸氏（熊川窯）の登り窯

１９９３年に崔熊鐸（チェ・ウンテック）氏が約４００年ぶりに熊川窯を復活させた。現在、熊川では３人が窯業に従事している。

崔氏以外では弟子の女性２人がガス方式で窯業に従事し、崔氏は登り窯方式で行っている。

崔熊鐸氏は、１９５６年生まれで、現在６６歳。独学で熊川窯を復活させた。幼い頃から山のふもとのあちこちに落ちている陶片に接して育ったという。平戸に連れて行かれて、中野窯を開いた熊川出身の陶工巨関（こせき）の精神的な末裔になろうと決意し、熊川窯の技法を受け継ぐために当時の窯跡をめぐってたくさんの陶片を収集した。崔氏は、次のように語っている。

「山に埋まっている陶片が師であり、山は私の学習の場だった。日本に渡った先祖とその子孫が作った作品を見ながら再現している。陶片を見ながら、土、釉薬、成形、火の強さなど茶碗を作る方法を習った。」

２．熊川陶窯址展示館

筆者は、２０１６年（平成２８）にこの熊川窯を訪れて、崔熊鐸氏からあちこち案内していただいた。その１つが慶尚南道昌原市が運営する「熊川陶窯址展示館」である。この展示館は、２０１１年１１月に開館したもので、開館式には三川内焼の産地である佐世保市から朝長則男市長（当時）も出席している。この展示館には、開館を祝して、巨関の子孫である今村家、高麗媼（こうらいばば）と呼ばれた中里エイの子孫である中里家から作品が寄贈されている。

熊川陶窯址展示館

また、展示館の裏に付属施設として「陶磁器体験工房」が整備されている。陶磁器体験工房の後方に「熊川陶窯址」がある。２００２年の発掘調査で６基の窯があったことが判明した。３号基と４号基が一般公開されている。

この熊川陶窯址は、１９９７年に慶尚南道記念物第１６０号に指定されている。

３．中野焼から三川内焼へ

高麗媼（中里エイ）は、巨関と共に熊川から平戸へ連れて来られた女性で、その後唐津藩領の椎ノ峰（佐賀県伊万里市南波多町）に移った後、窯を開いていた中里茂右衛門と結婚している。夫の死後、１６２２年（元和８）に子の茂右衛門を連れて椎ノ峰から平戸藩領の三川内に移住して長葉山（現在の三川内山）に窯を開いた。

１６３７年（寛永１４）に巨関の子今村三乃丞は藩主の命により、長葉山に藩窯を創設した。この時、陶工中里茂右衛門や椎ノ峰から招聘した陶工福本弥次右衛門、口石長右衛門、金氏太左衛門、藤本治左衛門、沖田久兵衛を窯焼方に登用した。

１６５０年（慶安３）に平戸・中野窯の陶工たちは三川内へ移され、中野焼は姿を消した。三川内焼は唐津藩領・椎ノ峰からやって来た陶工たちと、中野村からやって来た陶工たちとによって、平戸藩の御用窯としてさらに発展をしていった。

三川内には、釜山神社の祭神として中里エイが、また、陶祖神社の祭神として巨関の孫の今村弥次兵衛（如猿）が祀られている。

本稿は令和５年６月例会の発表の要旨である。

参考文献

久村貞男『三川内窯業史』芸文堂２０１４年
『豊臣秀吉の目に留まった朝鮮茶碗、日本に渡って国宝に』２０１８年１１月６日付中央日報日本語電子版